

ニート手前な駅長さん

いろは

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

かの有名な双子がいるギアステーション、そこで職員にすべてを任せて大抵さぼつて  
いる「駅長」の職がなければ完全に二ートな駅長さんとその周りの話。

※ねつ造設定あり、最強？設定あり。

※結構前に書いたものの、設定が結構好きだったのでちょっと公開してみました。こ  
のキャラとの絡みが見てみたい、こういう話が読みたい、っていうコメントがあつたら  
書くかもしれないし書かないかもしれない。

目

次

番外：マーマレード

ノボリ①	クダリ①	リオ①	リオ②	まくらと久遠①	レッド①	レッド②	レッド③	レッド④	レッド⑤	レッド⑥	
1	13	19	22	25	35	44	51	57	64	70	78



# ノボリ①

「モンメンが欲しい」

唐突に告げられた言葉に、思わず私は仕事をしていった手を止めて、発言の主を凝視しました。

表情筋の動きが乏しいのか、いつも仮面みたいな無表情で怖いと影で言われたこともあつた私の凝視という、自分で言うのも悲しいのですが、その、子供が泣き出しかねないコンボに、しかし当人はびくともなさりません。

「ノボリはモンメン、持つてないの？」

不満そうに眉を寄せて繰り返し呼ばれたポケモンの名前に困惑が隠せませんでした。モンメン、と言えば、確かヤグルマの森周辺に特に生息している、草タイプのポケモン。さして珍しいわけでもなく、取り立てて強いというわけでもありませんので、何故彼女がここまで執着しているのかが理解できません。

「残念ですが、私は持つていませんね。それにしてもどうしたのです？貴女が自らポケモンを欲しいなんて言うのは初めて聞きましたが」

「そう？」

「それに、貴女はすでにカントー地方の珍しいポケモンを持つていらっしゃいませんでしたか？」

よく彼女についてまわっていた、茶色くて小さな可愛らしいポケモンを思い浮かべながら言いました。彼女の構つてもらつてぴやあ、と嬉しそうな声を擧げる様子が大変可愛らしいと職員の間でも評判でございましたので、印象に残つております。幾人かの女性職員がどこで手に入るのか、彼女を問い合わせていたことすらあつた気がいたします。あのときの彼女達の表情は：いけません、これ以上思い出すと夢に出てきそうです。

「うん……このあいだ進化した」

「！ それはそれは、おめでとうございます」

「うん。だからモンモン欲しいの」

会話の流れがさっぱりでござります。

しかしまあ、これはいい機会ではないだろうかと私は考えました。

そう。この二一ト一歩手前の『駅長（仮）』もとい『ギアステーション管理人（仮）』、正確にはギアステーション建設地及び建物物貯貸主である彼女が堕落した引きこもり生活から脱出するいい機会だと。

彼女——いつまでも三人称で呼ぶのもどうかと思いますので、名前を述べさせていただくことにします——リオさまは、前駅長の一人娘でいらっしゃいます。幼いころに母

親が亡くなられて、それからしばらくイツシユから離れた遠い地方の知り合いの方に預けられていたらしく、構つてやれなかつた分精一杯甘やかしてあげたいのだ、と前駅長は仰つていたものでした。

——その駅長も、もう亡くなられてしまつたのですが。

しかし、その駅長がどれほどリオさまのこと可愛がつていたかは手持ちのポケモンの珍しさからも一目瞭然でしよう。たしか、彼女のポケモン——イーブイ、でしたか——は、生息地のカントーですら珍しく貴重なポケモンでござります。直接そう仰られたのを耳にしたわけではありませんが、おそらく駅長がツテを使われたのだと私は考えております。

——と、失礼、今は一応彼女が駅長でございました。とはいっても、彼女は駅長業務をギアステーション職員に全て委託しておりますから、駅長、と呼ぶには少々語弊があるようでしつくりいかないのですけれど。

推測できた方もいらっしゃるのではと思ひますが、つまり、亡くなられた前駅長は、大変可愛がつていた一人娘であるリオさまに、ギアステーションの土地も建物も、彼が持つ全ての権利と財産を譲渡なさつたのです。

元々このギアステーションやバトルサブウェイという施設は前駅長がすべて作り上

げ育て上げたもの。父親としての駅長のその行動に口を挟めるような者はだれもございませんでした。

一応リオさまは此処のトップとしての立場も譲渡されたようなものですが、彼女は全くそういうった地位に興味がないのか、サブウェイマスターに全権を委託して自身はおとなしくされています。素人に見当違いなことで口を突つ込まれたり、勝手なことをされたりしないのは助かるのですが、その、なんといいますか。

つまりは、彼女はおとなしすぎるのでございます。

ああ、いえ、やはり語弊がありますね。なんと表現したらよろしいのか。

リオさまは、ギアステーションのある通路から繋がる、隠し部屋（本人は普通の部屋だと仰つておりましたが、どう見ても普通にたどり着けないあそこは隠し部屋だと断言させていただきます）に住んでいらっしゃいます。前駅長がようやくひと段落ついて彼女をお引きとりになつた際に、家族の時間を少しでもとろうと考えなさつたのか、ギアステーション内に家——というか、生活区域となる部屋をお作りになつたのです。前駅長は仕事で駅に大抵寝泊りしたまま仕事を片付けていらっしゃつたので、言わんとしているところは分からぬもないのですが。

その部屋には当然ライフラインがござります。ある程度の広さや快適さ、その他諸々も確保されているそうです。

そしてリオさまは、その部屋から滅多にでてこないのでござります。  
ギアステーションをうろついている様子ですら珍しく、密かに職員一同日々気を揉んでいるのです。

特に彼女に魅力があるとか、恩があるとか、そういうわけではないのですけれど、毒にも薬にもならないような方ですので、なんとなく気にかかるのです。

リオさまは賃貸主で、しかもこの施設の規模では何もしなくてもこれから先も莫大な安定収入が得られます。が、しかし、その、できればこの引きこもり生活から脱出させ、更生させたいというのが昔からの職員の密かな野望でもあるそうで、できれば私もそれに微力ながら手を貸したいものだと考えたのです。

このライモンシティから出て、ヤグルマの森に出かけるというだけでも、部屋の中に引きこもっているリオさまが外に出るようになるきづかけとなる可能性は十二分にございます。

ええそうですとも、閉鎖された空間にばかりいるからきつと動きたくないなるのです！賑やかな人ごみ、広い街並み、どこまでも続く青い空！地上に出て解放感溢れる外の空気を味わえば、きっとリオさまも今の堕落：もとい、非活動的な生活から脱出できるはずです！

そうとなれば、あとは行動あるのみです。リオさま自らがモンメンをゲットしに赴く

よう仕向けるべく、私は口を開きました。

「あの、リオさま！此処の職員には飛行タイプのポケモンを持っている者もござります。中でもすばやきの高いポケモンでしたらヤグルマの森まではあつという間でございますよ。よろしければ、お借りして一緒にモンメンをゲットしに――」

そして、ひゅごつ！となにかが宙を割く音。さらにパンとボールが聞く音と、半瞬遅れたごおつと炎が燃える音は、ほとんど同時に私の耳に届きました。

「しゃ、シャンデラ…？」

何が起こったか把握できずに、目の前で私を庇うように立ちふさがっているシャンデラに困惑した視線を向けました。しかしシャンデラは一声だけ応えるように声をあげたものの、ある一点から警戒を解きました。

ふと、からん、と音がしたため音源を見れば、黒焦げになつたスパナが足元に転がつていました。

焦げ…というと、さつき上がつた炎が燃やしたのでしょうか。つまりは、飛んできたスパナをボールから出てきた私のシャンデラが燃やして墮としたと…？ああ、だからこの子は私を庇つてているのでしょうか？

いえ、そもそも何故スパナが飛んでくるのです？誰か教えてくださいまし。

「ノボリ、どうかした？」

「え、いえ、その…なんでもありません」

「そ？」

不思議 そうに訊いてきたリオさまにはそう答えるしかありませんでした。どうかしてもなにも、私が訊きたいくらいでございます。

それから、リオさまはシャンデラが何を見ているのか気になつたのか、その視線を辿ると、ぱちりと目を瞬かせて、口を開きました。

「ちいくん？」

「え、」

「どしたの、そんなところで。おいで」

呼ばれた名前は確か、

と、思考に沈むと同時に、ぴやあ♪という嬉しそうな高めの鳴き声が聞こえました。  
どことなく紫がかつたシルバーの、ビロードのような毛並みは思わず感嘆の息を漏らしてしまいそうなほど美しく、しなやかなシエルエットと優美な動きがさらに目を惹きつけます。するりとりオさまの足元にすり寄つたそのポケモンは、再び高い甘えた声をあげました。

「よしよし。どしたん、ちいくん」

うりうりと喉をくすぐられたその子は幸せそうに目を細めて、さらになにかをねだる

ように声をあげて、その体を摺り寄せます。その様子も大層可愛らしい：そしてふと頭を過ぎつたのは、リオさまが連れていたイーブイです。

「リオさま、もしやそのポケモンは、イーブイが進化した姿でございますか？」

「そ。エーフィっていうの。ちいくんが進化したいのにさせたらこうなった」

「とても愛らしゅうござりますね。もとからもそうでしたが、さらに美しさが増したようになります」

「だつて、ちいくん」

うれしい？と尋ねた先で甘えた声でエーフィがなんと答えたのかは分かりませんが、それにしても素晴らしい。引きこもりではあるものの、どうやらリオさんはとてもポケモンとよい関係を築けているようでございます。スーパーブラボー！

しかしポケモンもやはり地下にずっといては気が滅入るというもの。エーフィのためにも、リオさまの脱・引きこもり作戦はぜひとも成功させねばなりません！

一層気合いを入れた私は、眠くなってきたのか、欠伸をしているリオさんに向かつて声をかけました。

「話を戻させていただきますが、私もお供いたしますので、リオさん自らモンメンのゲットにお臨みになるのはいかがで――」

びゅお、と黒いなにかが頭のすぐ横を恐ろしい速さで通り過ぎていきました。さきほ

どは炎でなにか——飛んできたスパナでしたが——を打ち落としていたシャンデラも恐れ慄いております。

まさか、いやもしかしなくとも、飛んできたのは……シャドーボール、では。あの速度で、しかもなにかにぶつかつた音がないということは、最終的に消滅するように操作していて、イコールかなり熟練した技と見受けられます。つまり威力も相当であり、弱点属性のそんな威力の技を目の当たりにすればシャンデラが怯えるのも納得のいく話でございます。

しかし、誰がそんな技を。

そろり、とエーフィの様子を窺いました。低く、るるると小さくうなり声をあげて威嚇の姿勢をとっているエーフィはふわりと新たに暗い色の玉、すなわちシャドーボールを浮かべてみせます。

ひく、と表情が引き攣つたのを感じたのは何時ぶりでしょうか。思わず私は「リオさま！」と彼女の名前を呼んでいました。

眠気がピークに達しつつあるのか、半目でこしこしと目を擦つているリオさまは、しあつたらずな口調で返事をお返しになりました。

「なあに、ノボリ？」  
「エーフィが！」

「ちいくんが？」

「ぴやあ」

甘つたるい声を出してリオさまにすり寄つている姿には、さつき威嚇して、といいま  
すか喧嘩を売つてきていたあの低い声や態度や表情、そしてシャドーボールなんぞ影も  
形もございません。しかし、あふ、とリオさまが目を閉じてあくびをした瞬間にこちら  
を睨みつけてくる様子を見て、ああ今のは白昼夢を見ていたというわけではなかつたの  
ですね、と思いました。見た目に反してゴーストタイプ技とは、えげつない。もしや、そ  
ういうポケモンなんでしょうか、詐欺ポケモンとか。

つらつらと巡る考えは現実逃避が入つっていたと言つても過言ではないでしょ。

「ノボリ？ 結局ちいくんがどうしたの？」

「…いえ、なんでもございません。気にしないでくださいまし」

余計なことを口に出した瞬間に、なにかが終わる気がいたしますので。

と続けたいところでしたが不思議そうに首を傾げているリオさまには言うことがで  
きませんでした。ふおん、とサイコキネシスの青い燐光を纏つたエーフィがこちらを  
じつと見ております。

というか、ゴーストとエスパーの複合タイプのポケモンは未だ発見報告がありません  
し、サイコキネシスヒュードーボールが使えるということはどちらかはわざマシンで覚

えさせられたわけですね。誰ですか余計なことをしたのは。あとでわざマシンの使用履歴を調べておきましょう。減給でございます。

「デ、デラ～…」

ほのお・ゴーストタイプであるシャンデラにはエスパー技のダメージは二分の一であるものの、気のせいかさきほどよりも威力が増している感のある攻撃のスタンバイにすっかりシャンデラが怯えてしまっています。二分の一といえど、見た目からしてどちらかといえばエーフイはゴーストタイプよりもエスパータイプである可能性が高く、であればタイプ一致で1・5倍の威力が見込まれます。…果たして、先ほどのシャドーボールとこの気合の入ったサイコキネシス、どちらが威力があるのか：考えたくないですね。シャンデラは仮にもサブウェイマスターである私のポケモンなのですが…誰ですかこんなになるまでイーブイを鍛えあげたのは。ブラボー、とでも言うと思いましたか？減給です、とにかく減給処分でございます。救済案としてクダリの書類代行でも構いません。

せつかくの貴重なりオさまの引きこもり脱出の機会でしたが、リオさまに面倒かけるなと言わんばかりに「ぜつたいれいど」並みの冷たさを持つて視線を送つてくるエーフイがそれを許してくれそうにありません。

——不甲斐ない私を許してくださいまし。

馴染みの職員たちに心の中で詫びつつ、職員の中でモンメンもしくはエルフーンを持つている人物をリストアップしていき、誰からたまごを譲り受けるか考えました。私も仕事がありますので、そうそう遠出はできません。キレた職員たちによるストライキがおきかねません。先ほどの申し出はリオさまが外出なさるという大義名分があればこそあります。

それに、強いポケモンからは強いポケモンが生まれやすくなります故、結果的にはよかつたのかもしれませんね、と誰にともなく言い訳しつつ、怯えるシャンデラを連れてその場を去りました。

# クダリ①

ふん、ふふーん♪と鼻歌を歌いながら軽い足取りでギアステーションを歩く。

すれ違つた職員達がちよつと不思議そうな顔をしてこつちを見て、ぼくの手元を見て納得したような面持ちでまた仕事に戻つてくる。

「またバチュルが生まれたのか」「ボスも好きだなア」なんて声が聞こえてきたけど、ざんねんざんねん！全然違う！

これは前の駅長の娘さんのリオちゃんにあげるモンメンのたまご！ジャツジくんに見てもらつたわけじやないから、強いコなのかはわかんないけど、でもたぶん強いコ！リオちゃん、自分からポケモン欲しいなんて言うの初めて！いつも部屋の中だから滅多に会わない！そういうのなんていうかぼく知つてる！二ートつてテレビで言つてた！

でも二ートはよくないこと！だからこのモンメンが強いモンメンになつて、リオちゃんがバトル好きになれば解決！お仕事できる！みんな安心！みんなでスマイル！うん、それつてとつても素敵！

そろそろたまごが孵りそだから届けにいかないと、つてノボリが言つてたから、ぼ

くが引き受けた。ノボリ、お仕事いっぱい。書類もいっぱい。ほんとはぼくも書類いっぱい、だけどぼくが持つていくつていつたら、ぼくのぶんの報告書も書いてくれるって言つた！だからたまご運ぶだけで1時間休憩できる！トレーナーが来なかつたらもつと休める、ぼくも嬉しい、ノボリも嬉しい、リオちゃんも嬉しい、みんなも嬉しい！いことづくめ！

久しぶりに行くりオちゃんの部屋への道を思い出しながら進んでいくと、キレイな薄紫のポケモンがいた。近くにトレーナーもいないみたい。どこの子かなつて思つたけど、思い出した。ノボリが言つてた、リオちゃんのイーブイ進化したつて。だからこの子はきっとリオちゃんのエーフィ！

バチュルもかわいいけど、エーフィもすつごくかわいい！だからぼく、にこにこしながらエーフィにたまご見せてあげることにした。

「見てみて！これ、モンメンのたまご！エーフィの弟分！うれしい？」

最初は興味がなさそうにしてたけど、ぼくの言つたことに反応したみたい。じつとたまごを見ると、ふつとエーフィとたまごを不思議な光を取り巻いた。これ、ねんりき？

自分で運びたいのかな、つて思つてみてたけど、ぼくの手から浮かんだたまごが急にぼとつて床に向かつて一直線！すごくびっくりしたけど、なんとかキャッチした。割れ

てないし、中からもちよつと音が相変わらず聞こえてくる。無事みたい。よかつたあ。

「だめ、エーフイ！ 気を付けないと割れちゃう！」

めつて怒つてみたけど、でもエーフイはちよつと体を低く構えて、ぼくのこと睨んでる。ぐるる、つて唸つてエーフイの体がまた光る。もしかして、たまご壊すつもり？ そんなんの絶対だめ！

ぼくはモンスターボールを取り出した。

「アイアント、エーフイ止めて！ 安全運転一番大事！ マナーの悪い子お仕置きタイム！」  
「きゅいいいいいい！」

苦手な虫タイプのはずなのに、エーフイ全然ひるまない。むしろかかってこいつて言つてる気がする。もう、ちよつとリオちゃんに悪いけど、ちよつと懲らしめちやえアイアント！

アイアントが飛び掛かつたそのとき、ついさつきまで迎え討とうと身構えてたエーフイがぱつとそっぽを向いて反対方向に行っちゃつた。

えつ？ てぼくとアイアントがびっくりしてたら、リオちゃんの足にすり寄りながら、さつき唸つてたのとは全然違う甘えた声だして！ どういうこと？

困つてアイアントと顔を見合わせると、エーフイだつこしたリオちゃんがこつちに來た。エーフイはなんか、きゆるんつとしてて、さつきまでのすました感じとかがなく

なつてゐる。このこ、ほんとにさつきのエーフイ？

「クダリ？ なんでアイアント出でるの？」

「え」

「別にだめとは言わないけど。なんで？ お散歩？」

「違う！ ぼく頑張つてたまご守つてたんだよ！ エーフイがリオちゃんにあげるモンメン  
のたまご割ろうとするんだもん！」

え、つてびっくりしてゐるリオちゃんはエーフイと目を合わせてじつと見つめてた。最  
初はこつちを睨んでたけど、リオちゃんの視線に耐えきれなくなつたのか、エーフイの  
ひんつて立つてたしつぽがだんだんうなだれていつて、リオちゃんは困つた顔をする。

「…ちいくん」

「ふいー…」

ぺたんと耳を伏せて、こころもち身を小さくしたエーフイがリオちゃんの様子を窺つ  
てる。そんなエーフイを見て、リオちゃんは真顔で言つた。

「モンメンのたまごは、おいしくないとと思うよ…？」

「び  
!!」

あんまりにもナナメウエー工な発言にエーフイもびっくりしてひんつて全身の毛を逆立  
ててゐる！ ぼくもびっくりでんぐり！ でもリオちゃんはそれをエーフイが知らなかつ

たんだと思つて、「だつて…綿っぽいし、草タイプだし、きつともしやもしやするよ。口の中渴きそう。久しぶりにポフイン作つてあげるから、たべちやだめ」なんて言つてる。たぶん違うと思うけどなあ、なんて心の中で呟いてると、手にあつたたまごからピシ、つて蟻が入る音がした！あわててたまごをリオちゃんに渡すと、床に下りたエーフィが恨みがましそうにこつち見た。リオちゃんのだつことられちゃつたからかな。でも、このままじやモンメンのおや、ぼくになつちゃうし。  
ぴしひし、ぱりん。

なんとか無事に生まれてきたモンメンにリオちゃんはにつこりして、前から考えてたんだつていう名前を教えてくれた。それを聞きながらエーフィは、イライラして尻尾でべしひし床を叩いてた。

「そうですか、そのようなことが…」

「そう！ぼくびつくりしちやつた！エーフィ、リオちゃん大好き。でもひどい！」  
「……私もアイアントを持つておくべきだつたんでしょうか…」

ぼそつて呟いてノボリはどこか遠くの方を見てる。横でなんでかシャンデラが落ち込んでいるけど、どうしたのかな。

「ああ、そういうえば、リオさまはなんとモンメンを名づけられたのですか？」

「まくら！」

「……え？」

「だから名前、まくら！ だっこして寝るって言つてた！」

「……」

「ノボリ？」

「……いえ、ああ…そういうことですか…」

彼女が部屋から出てくる日は遠そうですね、とノボリはなんだか疲れた顔して言つた。

んー、つて返事をしながら、ぼくはモンメン鍛えてあげればなんとかなるかなあ、とか考えた。

# リオ①

不思議な空間が、広がつていた。

光る壁に突つ込んでいったと思えば、消えていく人影。

がやがやと人が集まつているところでは、物を売つてしたり、なにか生き物同士を戦わせていたり、なにやらタマゴを持つていてたり、交渉をしていて、さまざまだ。しかしそれだけ人がいるのに建物は一切なく、美しい自然がそのままの形を保つている。

不思議に思つてきよろきよろしていれば、たまたまこちらを見たらしい男性が、近づいてきて「新入りさんか?」と尋ねてきた。なんのことだか分からず首を傾げれば、「やっぱり新入りさんだ」とため息をついた。なにかを言い返す暇もないまま、「ついてきて」と腕を引かれる。抵抗してもよかつたが、とりあえず大人しくついていくことにした。

少し歩くと、銀色の毛皮が見えた。とてもふわふわもこもこのもふもふした気持ちよさそうな毛皮だった。男性は迷わずそこに歩いていくと、よく見ればあつた人影を揺らし始めた。

「起きてくださいよ、ほらおーきーてー」

「うぐう……あと300秒…」

「何故秒で言つたし。ほらほら、新入りさんですよりオさん！ちゃんと説明してあげないと可哀そうでしょう。なにがなんだか分かつてませんよこの子」

もふもふした狐のような生き物の毛皮にくるまつて、さらに別のもふもふした生き物を抱きしめて、彼女はいた。女性と呼ぶには幼く、少女と呼ぶには育ちすぎている。目はまだとろんとしていて、舌足らずな口調も合わせ、まだあまり頭が働いていないようだ。

「ちよつと、まつて」

言われて大人しく黙つて待つ。「ここまで連れてきてくれた男性が「ごめんね」、もうちよつとしたら起動すると思うから」と言つた。こくり、と頷きを返す。

「おしご」と、と呟きが聞こえた。彼女が呟いたようだつた。「おしご」と、おしごと、おしごと、「ぶつぶつと何回も呟いたかと思うと、一度目を閉じてかつと目を見開く。びびつて後ずさつた。しかし彼女はそんなことは気にもしないといつた体でさきほどのとろんとした表情とは全く異なるきりりとした迫力のある表情をしていた。

「やあ、失礼。私は寝起きが悪くてね！いつもなら公私の切り替えもぱつとできるのだが寝ぼけていると数十秒かかるしてしまう。忌々しきことだがまあ仕方あるまい。さて

さて、訊きたいことは多数あるだろうが、私がまず君に言うべき言葉はただひとつだ  
　ぱちん、と指を鳴らすとともにどこからともなく駅員のような帽子を取り出した彼女  
　は、それをかぶるとまさにアルカイックスマイルと呼ぶに相応しい、ぎこちなくはある  
　ものの、味のある笑みを浮かべて、電車を見送るように私に向かつて敬礼してみせた。  
　「VRMMORPG「ポケットモンスター」へようこそ！君の世界の我らが友が君のこと  
　を歓迎してくれるよう願つているよ！」

# リオ①

不思議な空間が、広がっていた。

光る壁に突っ込んでいったと思えば、消えていく人影。

がやがやと人が集まっているところでは、物を売つてしたり、なにか生き物同士を戦わせていたり、なにやらタマゴを持つていたり、交渉をしていたり、さまざまだ。

しかしそれだけ人がいるのに建物は一切なく、美しい自然がそのままの形を保つている。

不思議に思つてきよろきよろしていれば、たまたまこちらを見たらしい男性が、近づいてきて「新入りさんか?」と尋ねてきた。なんのことだか分からず首を傾げれば、「やっぱり新入りさんだ」とため息をついた。なにかを言い返す暇もないまま、「ついてきて」と腕を引かれる。抵抗してもよかつたが、とりあえず大人しくついていくことにした。

少し歩くと、銀色の毛皮がえた。とてもふわふわもこもこのもふもふした気持ちよさそうな毛皮だつた。男性は迷わずそこに歩いていくと、よく見ればあつた人影を揺らし始めた。

「起きてくださいよ、ほらおーきーてー」

「うぐう……あと300秒…」

「何故秒で言つたし。ほらほら、新入りさんですよりオさん！ちゃんと説明してあげないと可哀そうでしよう。なにがなんだか分かつてませんよこの子」

もふもふした狐のような生き物の毛皮にくるまつて、さらに別のもふもふした生き物を抱きしめて、彼女はいた。女性と呼ぶには幼く、少女と呼ぶには育ちすぎている。目はまだとろんとしていて、舌足らずな口調も合わせ、まだあまり頭が働いていないようだ。

「ちよつと、まつて」

言われて大人しく黙つて待つ。「ここまで連れてきてくれた男性が「ごめんねー、もうちよつとしたら起動すると思うから」と言つた。こくり、と頷きを返す。

「おしご」と、「おしご」と、呟きが聞こえた。彼女が呟いたようだつた。「おしご」と、おしご」と、おしご」と、「ぶつぶつと何回も呟いたかと思うと、一度目を閉じてかつと目を見開く。びびつて後ずさつた。しかし彼女はそんなことは気にもしないといつた体でさきほどのとろんとした表情とは全く異なるきりりとした迫力のある表情をしていた。

「やあ、失礼。私は寝起きが悪くてね！いつもなら公私の切り替えもぱつとできるのだが寝ぼけていると数十秒かかるまい。さて

さて、訊きたいことは多数あるだろうが、私がまず君に言うべき言葉はただひとつだ「ぱちん、と指を鳴らすとともにどこからともなく駅員のような帽子を取り出した彼女は、それをかぶるとまさにアルカイックスマイルと呼ぶに相応しい、ぎこちなくはあるものの、味のある笑みを浮かべて、電車を見送るように私に向かつて敬礼してみせた。「VRMMORPG」「ポケットモンスター」へようこそ！君の世界の我らが友が君のことをお迎してくれるよう願つているよ！」

## リオ②

「VRMMORPG…？」

Online Role-Playing Game（バーチャル・リアリティ・マッシュブリード・マルチプレイヤー・オンライン・ロール・プレイング・ゲーム）の略語さ！仮想現実大規模ロールプレイングゲームとも言うね！

ゲームにアニメに漫画にグッズ、エトセトラ。大人から子供まで、かつてないほどの大人気となつたポケットモンスターはなるべくしてオンラインゲームと化したわけだ。しかも、ただ選択するだけの以前のゲームじやない。

よりリアルに、あえて言うならばアニメのような自由度が高く、柔軟性のあるバトルができるようにシステムも多少変化している。

コマンドではなく音声による指示や、技を組み合わせた自分だけのコンテストバトル、フィールドの有効利用に友情・根性・愛情といったいわゆる絆のチートとやら、撫でたりポフインやポロックを与えることも、一緒に寝たり食べたりと生活を共にすることも、ボールの投げ方なんかも自分で好きなようにすることが可能だ。ちなみに1ターン

ン1攻撃制度もなくなつた。それが吉とてか凶とてかはプレイヤー次第だがね。バトルのルールも追加されていて、数の指定はもちろん、見せ合いの有無やダブル・トリプル・ローーション、道具もポケモンのみかトレーナーもアリかの選択、そして技の数もフォースキル・フリースキルの選択ができるのさ！ポケモン自体はわざをいくつでも覚えられる仕様になつたからね。

まあその背景にはよりリアリティを出すために食費や光熱費その他諸々の生活費も支払う必要性ができた、ということもあるのだけれどね！

君が決めた【設定】にもよるけれど、おそらくポケモンを大量に保持するのは大部分の人にとって難しいものとなるだろう。なんせポケモンのベストコンデイションを維持するためには、いろいろとお金が物入りだ。

まあ、そのための対策措置というわけさ。秘伝わざですべて覚えているわざが埋まつてるポケモンなんて、バトルではあまり使い物にならないからね。

ああ、ちなみに目があつただけでバトル開始——なんて理不尽なことにはならないから安心したまえ。残念ながら君の世界がどうなつているかは知らないが、此処でのバトルは全てのルールを制限し、お互に受諾した上で行われない限り有効とならないさ！カツアゲに遭うこともない。しかし万が一そんなことがあつたら私に言えればいい。君の世界に関与する気はないし、というかできないだろうが、此処においては私の力の及

ぶ限り力になるとしよう」

つらつらと語られる言葉は一気に頭には入つてこない。

しかし少し気になつたのは、まるで、一人ひとりにその人のための世界があるようなことをいうものだ、ということ。

そのことについて言えば、「もちろんあるとも」と答えたが返つてくる。

「赤・緑・青・黄・金・銀・水晶・紅玉・蒼玉・翠玉・真珠・金剛石・白金・黒・白、君がどの、そしていくつのパツチを持つてているのかは知らないが、そのパツチに応じた君の世界が君のこと待つていてることだろう！パツチがすなわち君の世界を開く君だけのキーだ。君の世界へは君以外の誰も行くことができない」

「MMORPGなのに？」

「だからこの場所がある。【ハイリンク】と呼ばれる場所さ。いわゆるプレイヤーである者たちだけが来れる場所。一種の異次元、もしくは閉鎖空間のようなものさ。ここには野生のポケモンはないし、プレイヤー以外の住人はいない。ここで交換やらアイテムや情報の売買やらバトルやらの交流に励むというわけだ！」

「…それだけ？」

「では逆に聞こうか。それぞれ固有の世界がなかつたらどうなると思う？」

「どうなる、つて…」

「リーグ制覇者が大量発生する可能性は高いだろうなあ。そうなるとリーグやジムリーダーの強さが疑問視されて、全員プレイヤーに置き換わるかもしれない。このゲームはポケモンの世界をよりリアルに再現してあって、この世界での生活や住人たちとのコミュニケーションも売りなのに、目当てのキャラの位置に別の人気がいたら嫌だろう？」  
好感度システムとかあるのだろうか。

「あるとも」と即答された。顔にていていたのだろうか。

「それに世界観上伝説のポケモンは一体しかいないのに、プレイヤー達が同一世界にいてごらんよ。世にも醜くて誰にも止められない争いが勃発するだろうよ。大体MМОRPGは俺TUEEEE!!がやりたくて集まつてくる連中がわりと多いんだ。それなのにチャンピオンやポケモンマスター、コンテストマスターが大量にいてごらんよ。萎えるだろう？」

それは、なんというか。

「とりあえず、詳しいことは場所を変えて2人で話そうか。このあたりでバトルをした  
そうな奴らがちらちらこっちを見てる」

知らず邪魔をしてしまったようだ。言われるがままに手をひかれ、人気のない森の方へと進んでいく。あのふわふわの生き物たちは置いていくようだ。しばらく歩いていくつか切り株がある少し開けた場所につくと、彼女は切り株に座り込んだ。

「さて、ここで聞きたいことがある」

彼女は眼を鋭くすると、いたつて自然な動作でピンと上空にボールを投げてみせた。パン、という音とともに彼女と同じくらいの身長の生き物がボールの中から現れる。「君、一体何者だい？」

言いながら口元は弧を描いているが、目は全く笑っていない。

「正直に答えてほしい。残念だが、仮に君が初心者でなく最強のポケモンを持つチャンピオンだとしても、私のサーナイトに君が持っているポケモンで太刀打ちするのは不可能だ、と断言しておこう」

「何故」

「この子のレベルは100を超えているからね」

どういうことだ。そういつた意図を込めて見れば、彼女はやれやれと両手を挙げて肩をすくめた。警戒は未だ解かれていない。

「製作者権限というヤツさ。私の仕事はゲームの中でプレイヤーの動向を観察し、不安な動きがあれば対処することだ。そのために特別処置として、私の持っていた元のゲームソフトからの引き継ぎかつレベル制限を解かれている。ああ、ちなみに隠しイベントではあるが、一般プレイヤーも条件を満たせばレベルは無制限にできるから問題ない。頑張ってくれたまえ」

につこりとうすら寒い笑顔を浮かべられる。おそらくそう簡単に満たせる条件ではないのではないだろうか。嘘は、言っていないのかもしれないが。

「私が作ったのはこの【ハイリンク】のシステムまでだけね。だから生憎それのパツチや他の機能については詳しくないんだ」  
でもね。と彼女は続ける。

「自分が用意したアバターについて、詳細までは覚えてなくともこれだけは言える。私はね、青く光るようなそんなアバター、見たことないよ」

連れてきた彼は単純にレアなエフェクトだと思つていたみたいだけどね。

そう言われて、体が蒼い燐光をまとつていてるのに気が付いた。生き物——ポケモンを見た時点で、思わず警戒して出してしまつていたらしい。これは単純にこちらのミスだな——そう思つてひとり頷くと、彼女はそんな反応を見て、なんとも言えないような感じで言つた。

「君はバグなのかい？」

「ハッキングしたとか改造した、じゃなくて？」

「だって、どうやつてそんなことするんだい」

「ゲームなのに」

「ゲームだからさ。そして某ゲーム風に言うなら私たちは【未帰還者】だ」

ログアウトできない、いわゆるゲームに閉じ込められた住人ってことだよ。

「何故が五感はあるし、三大欲求やらなにやら、現実世界と同様にあるから実感はないけれどね。しかし私もプログラマーの端くれだというのに、全くコードに干渉できないのだから無能もいいところ。そもそもどこでどうやって入力するのかわからない。ハッカーーや違法改造する人がいるならぜひともご教授願いたいものだ」

もし君がそうだというなら、是非教えてもらえるかい？」

慌てて首を振れば、「それは残念だ」と至極残念そうに彼女はつぶやいた。

「取り乱す人とかは、いなかつたの」

「いたよ。だから、忘れさせて彼女の【世界】に送った」

基本的に親や出身地といった細かい設定までして、個人仕様にこだわったパッチが配布されるのだ。それだけ元のゲームよりは高価で注文から発送まで時間がかかるようになつてきているものの、それだけの価値がある作り込みようになつてきている。プレイヤーが自らがプレイヤーだということを忘れて、その世界の住人の一人として普通に暮らしていけるレベルには。

「選んだのがサーナイトでよかつたよ。そういう対応にエスパー ゴーストタイプのポケモンはとつても適している。嘘なんかも分かるしね」

いつもありがとうね、と彼女は傍のサーナイトを撫でた。サーナイトはふわりと慈愛

に満ちた優しい笑みを浮かべる。

なるほど。そういうからくりでここは平和を保ち、まわっているのか。そうか。  
まだ観測したことがないのにやけに”if”が多く存在すると思ったら、そういうことだつたのか。

存在する似たような「個人の世界」は「平行世界」とひどく似通つてゐる。それはあの機関が好む「もしも」の可能性の模索の結果ともひどく似てゐる。此処はきっとあれにとつての絶好の観測場所となるんだろう。

「それで、君は一体何者なんだい？バグ？ハツカー？はたまた別のはにかかる？」

「そうだな、あえて言うなら」

すっかり思考に集中してしまつていたようだ。そして自分の定義を思い返して、なんといえば一番伝わりやすいかを考える。自分が何なのか、どういうシステムで此処にいるのか、何がしたいのか、そんなことを説明していたらキリがない。

「神様、つてやつだな」

彼女はぱちり、と目を瞬いて、「おや、まあ」と声を漏らした。

「恰好が制服の少女つてのはどうだろう。いやいや、似合つてゐるし、君の容貌はとても可愛らしい。しかし、せつかく蒼く発光するくらいだ、髪をこう蒼っぽい銀とかにして、服も青系統で統一してはどうだろう——ああ、性別を変えてみてもいいかもしれない

ね。今の君は男どもがなんだか群がりそうな愛らしさだ——訂正する。今度は婦女子が群がりそうだ。もう少し年齢を抑えて、：「ああ、いいんじやないか？シヨタな腐女子が湧きそうではあるが、絶対数がまだ少ない可能性はある。賭けてみてはいかがかな」言われるがままに姿を変えてみて、しかし変な人だと思う。普通神様とか言われたら「頭おかしいんじやないか」とか、状況を考えれば「元の世界に還して！」とか言われそうなものだが。

「ああ、どうにができるならしてもらつても構わないが、できないならできぬで構わないんだ、私は。残つていてる人も同様さ。騒ぐ人や悪いことやらかす鬱陶しい奴らはすでに記憶消去で彼らの世界へ送つてある。【ハイリンク】にいるのはもはや自分の世界で生きることに前向きな連中だけだ」

それに、私はむしろ感謝したいかもしれない、と彼女は警戒をすっかり解いて笑う。

「そりやあ最初のハイリンクの混乱ぶりはすごかつたし、私はとても忙しかつた。けれど、落ち着いた今となつては現実世界では考えられないとしても楽しい自堕落生活を送つてゐる。私の動きがどう作用したのか分からんんだが、お金に困らないニート生活なんてすばらしいと思わないかい？こればっかりは神の采配とやらに感謝するしかないと思つてゐるんだ」

にこにこしてゐる彼女に本当に変な人だな、と思う。

私に、：今は少年の姿だつたな。俺に何も求めないなんて、本当に変な人だ。  
けれどまあ、悪くはない、な。

「せつかくだから帰る前にハイリンクを観光していきなよ神様！狭いし魅力的な建物なんかはないけど、なかなかバトルも迫力があるし、見応えがある！バトルが苦手な人も良く考えて努力値屋さんとかいろいろやつてるんだ。面白いぞ！」

伸ばされた手を、少女だつた蒼い少年は多少戸惑いながら掴んだ。

少年のカタチのそれは、いずれある少女にイデアと呼ばれるモノだつた。

# まくらと久遠①

「てーりやああああああ！」

「ぼふん！」という音と共に現れる人形。同時に、しゆるりと何かが体に根を張つて、吸い取られる感覚。

しかし彼は慌てず騒がず口から青い炎の「かえんほうしゃ」を人形に向かって放つ。その威力に耐えきれず消え失せた人形には見向きもせず、その後背後に回っていた本体のエルフーンに「おにび」をぶつけた。

「ぎやふつ」

「懲りないな、お前も」

呆れたように呟いたキュウコンは、軽く「ひのこ」を放つて自分の体に植え付けられた「やどりぎのタネ」を燃やす。大した威力でもない炎は自らのタイプも相まって効果はさらに二分の一。さしたるダメージにはならない。しかしタネを焼かれてしまつたエルフーンは「ああああああああああああああ！」との世の終わりのような悲鳴を上げた。「ひどいっす！超ひどいっす！マジ鬼畜！俺の回復ライン断つとかひどい！ついでにおびぶつけてくるし！やけどとかマジ勘弁してほしいんスけど、やどりぎあつても回復

あつてないようなものじやないすか！しかもライン断つし！大事なことだから2回言いましたあ！」

「いきなりこつちにちょっかい出してくるお前が悪いだろうに」

正直「ほのおのうず」で身動き封じてじわじわ体力を削ろうかとも考えたのだ、むしろ実行しなかつた自分に感謝してほしい、とキュウコンは思う。

「オレもつと強くなりたいんすよー！いーじやないすかちょっと倒されるくらいーー」「相手を選べ。相性が悪いだろうが」

経験値一経験値一とぼやくエルフーンにチーゴの実を渡してやりつつ、キュウコンは馬鹿なんだろうかこいつというような目で見た。

この間はエーフィやサーナイトにも同様にバトルを挑んでこてんぱんにのされていた。うん、やっぱり馬鹿だ。草はエスパーと相性最悪だから当然の顛末である。

「マスターと一緒にバトルしてたときは大体タイプ相性悪くても勝てましたもん！やどみがコンボ最高つすね！マスターも最高！大好き！オレいつか草ポケモンの頂点に立てるかもしんね！」

「阿呆か」

やどみがコンボとは、やどりぎのタネ十みがわりという技の組み合わせである。やどりぎのタネは相手にタネを植え付けて、じわじわとHPを吸い取る技、みがわりはHP

の四分の一を削って身代わりを作りだすわざである。身代わりは一定以上のダメージを加えると消え去るが、逆に言えば一定以下であればずっとホンモノの代わりにダメージを受け、しかも補助技も無効となる。ついでに身代わりは消えてもホンモノにダメージは通らない。上手く起動すれば、ダメージを喰らわず相手をじわじわ甚振り、一方で自分は完全回復というかなりの鬼畜コンボとなることが可能だ。

「やつてみなきやわかんないっしょ!? 手始めにあのエーフィはボコる、絶対いつかボコる。諦めなければ夢はきっと叶うってギアステーションで誰かが言つてたつすよ！」

「あーうん、諦めろ」

「一刀両断!?」

「だから、相性が悪すぎる」

「タイプ程度でオレが負けるつて決められるんすか！ オレ、ブラックシティにいるビジュスマントークンなら余裕で伸せるのに！」

「いや、特性の問題だ」

「うえ？」

ぱかーんと間抜け面を晒したエルフーンにもういいだろうとそっぽを向いて丸くなるキユウコン。しかしエルフーンはそれを許さず、鼻先に潜り込んで呼びかける。

「え、そこでやめるとかなんて放置プレイ!? すげー気になるじやないすか！ 続き！ 続き

!!

「うるさい。あとお前綿だからあんまりくつづくな静電気でぱちぱちして鬱陶しい」

「お、オレ電気わざも使えたりするんすかね？ひこう技は使えるんすけど。ぼうふう超便利。虫とか草とか一撃つすもん。なかなかあたんねーけど」

「あーはいはい、使えたらしいなー」

「超適当にあしらつてる！だがオレ様は諦めないっすよお！ことあるごとに突つかかってくるあのエーフィの野郎伸す手がかり探すまではああああああああ！」

「喧しい：仕方ないだろ、お前『まくら』なんだから」

「理由になつてないっす！元はマスターの抱き枕だつたのがあいつだつたつてのは聞いたけど！つかそんなに嫌なら進化しなきやよかつたつしょ!!」

「主も予想外だつたんだろ、まさか『かわらずのいし』から持ち替えてるときにレベルが上がつて進化するなんて」

進化してから何日かして、「もふもふ具合が足りない」とか言い出した主が図鑑を見だしたときにはエーフィのショツクの受け具合はすごかつたとキユウコンは思う。ついでにモンメンが孵化した日の機嫌もすごかつた。嫉妬の余波でめいそうを限界まで積んだサイコキネシスをお見舞いされるんじゃないかと身構えた。抱き枕ではないものの、主がエーフィと一緒に寝るのをやめなくてよかつた。本氣で。

「世の中の不条理さを味わつてゐる気分つすー。でもなんでオレあのエーフィに勝てないんすかあ」

「あいつは特性がマジックミラーだからな。やどりぎのタネが跳ね返されて効果がない」

「なにそれチートじやないすか！」

ついでに言うとやどりぎのタネが発動しなければやどみがコンボはほぼ成り立たない。回復手段もなくみがわりを連発すればHPが減つてジリ貧になるだけだからだ。

「もらひび持ちがおにびしたりすれば逆効果だけだな。あとはちくでんか」

「オレ違いますもん！ いたずらごころつてマスター言つてましたー」

「知つてるに決まつてるだろう。そうじやないと自分の攻撃よりお前のみがわりが早い説明がつかない」

特性：いたずらごころは、補助技限定ですばやさに関係なく先に技を出させるという性質である。この特性によつて、エルフーンはみがわりを出す前に一撃でダウン、という展開を避けられる、のだが――

「ついでにマーマレイドの特性はトレースだ。トレースされて同じいたずらごころ持ちになればそりやあマーマレイドの方が早くて当然だ」

「かいみんじゅつ喰らつて気が付いたら夕飯の時間だつたつす……」

「ま、先手を取れない以上マーマレイドを倒すのは諦めるんだな」

「ううう、ママ先輩つええ…」

マーマレイド、とはサーナイトの名前である。よく主人であるリオにはママとかママンとか呼ばれている。：非常に彼女の立ち位置が分かる愛称である。

「うぐう…じやあせめてエーフイの野郎を伸す方法はないんすかあ、くーちゃん先輩い」

「お前がくーちゃん言うな、気持ち悪い」

「うええ、マスターはそう呼んでるのにい」

「久遠と呼べ、久遠と。：まさかお前そのノリであいつのことちいくんとか呼んでないだろうな？」

「ちいくんとかあの性悪エーフイにそんな可愛い呼び名不必要つすよ！あいつはエーフイで十分っす！固有名詞で呼ぶ必要性感じねえ!!あいつ何してかしたかわかつてます？殺人ならぬ殺ポケ未遂つすよ！まじ信じらんねえ!!」

「……はあ。ま、お前が勝つとしたら、レベルを上げてから威力の高いワザでゴリ押しくらいしか思いつかんな。自分がいるとき選んでタメなしでソーラービーム連発でもするか？」

「ソーラービーム連発つて無茶言わないで欲しいっす先輩。アレ結構溜めるの時間かかるのにい」

「だから自分がいるときと言つてはいるだろうが。主が言うには自分の特性は『ひでり』らしいから、ソーラービームの溜めの時間がなくなるらしいぞ」

「え」

きらんとエルフーンの瞳が光る。

「ガチつか」

「ま、嘘ではなかろうな」

昔は自分が呪われているのだと思つていたものだが、今となつてはもはや懐かしい。生命に恵みをもたらす雨を完全に遠ざける黄色い口コンであつた自分を嬉々として拾うような変わり者の主と出会えたことは、なによりの僥倖であるとキュウコンは思つてゐる。野生の仲間たちから爪弾きにされたり、人間からは石をぶつけられる等の暴行を加えられ土地を追い出されたりしたものだつた。

今、主が住んでいる部屋はそこそこ深い地下にあるため、キュウコンの特性である日照りの影響がライモンシティにまでは届かない。最悪、もしその特性が遮られることがなければ、一緒にずつと旅しようか?と問い合わせてくれた主には心から感謝しているのだ。稀に主が地上をうろつくときも、傘が絶対にいらぬいから助かるねと笑いかけてくれるおかげで、現在ではあまり自分の呪われたような性質も気にならなくなつた。

まあ、特性がもらいびだつたら最初のやどりぎのタネ、思いつきりかえんほうしやで

自分の体から焼き払えたんだがなあ、と考えはしたが。

なんて、思いつきり思考に浸つていたら、突然エルフーンが「先輩さいこおおおおおおおお！」と奇声を上げたので、思わずびくつと体を震わせてしまった。

「おっしゃ、じやああとはレベル上げるだけっすね！クオン先輩倒されてくださいよお」「嫌だ」

「そんなこと言わずに！ 可愛い後輩のためっしょ！？」

「黙れ」

「だつてレベル足りないんだもん！」

「可愛い子ぶるな。他のを狙えばよかろうに」

「えーだつてわたあめ先輩狩るわけにもいかないっしょー？癒しつすよ？むしろ先輩攻撃したら誰がオレの回復してくれんすか？」

タブンネのわたあめ（↑名前）は性質含め、HPの回復から状態異常回復までなんでもござれな回復のエキスパート的存在である。トレーナーの指示下以外でエルフーンが何度も他のポケモンに喧嘩売つても生きているのは彼女のおかげ以外の何物でもない。

「あとは、えーとあと一匹いたっすよねー。確かミロカロスとかいう水ポケの一……時が止まつた。

エルフーンは、見た目の可愛らしさにそぐわない、あくどい笑みを浮かべた。

「あー、いたつすねえ。水ボケ。カモ。ふひつ、経験値ウマーハー」

ついでに言つておくとこのエルフーンのまくらの努力値は防御252特防252素早さ6と受け型に振つてある。つまり守りが固く、効果抜群の技でもないとそうそうH

そんなエルフーンに、特に有効な攻撃手段を持たない水ポケモンとか。

流石にキユウコンも（あ、やべ）と危機感を覚えた。

だがしかし、エルフーンは止まらない。

につこりスマイルを浮かべて敬礼すると、ミロカロスのいた方にあつという間に飛んでいく。（誤字ではない）

「せーんーぱああい!! あつそびましょーーーー!」

響き渡つたミロカロスの悲鳴に、キユウコンは黙つてタブンネを誘導しつつ、エーフィがステーション内の散策から戻ることを祈つたのであつた。

# レッド①

赤を纏い、肩にピカチュウを乗せたトレーナーが次の車両へと乗り込むのを見届けると、ある鉄道員はどかつと思い切り座席に腰を下ろして、満足げな吐息を漏らした。全力で挑んで、負けた。悔しさなんか通り越して、すがすがしくらいに圧倒的な力の差だつた。

もしかすると、もしかするかもしれない。

きつとボスたちも久々に存分にバトルが楽しめるやろ、と考えて、ふと今日の「特別指令」を思い出す。

「……あっ」

まずいまざいまざいますい。

たらりと冷や汗が流れるのを感じた。

今日は、今日だけは、どうにかして”最後の車両”には絶対辿り着かせないように全職員尽力するよう、というのが朝礼で伝えられた事項だつた。

にも関わらず、今、自分は、何をした?

だつて、なにせ今日あの扉に向こうにいるのは、

\*\*\*\*\*

ういん、と無機質な機械音と共に開かれた扉の向こうにいたのは、キユウコンの毛皮に包まれてすいよすいよと気持ちよさそうに眠る、そう年も変わらなさそうな少女だった。

「……？」

ぴいか、と名前を呼ばれて、肩に乗った相棒と目を見合させる。

だよね。おかしいな。確か最後の車両にいるのはサブウェイマスターっていう黒ずくめか白ズクめの服装の人だったはずだ。ぼくが乗つてるのはシングルトレインだから、乗つてるのは黒い方。——の、はずなんだけど。

「ピカチュウ！」

ひよいつと軽い身のこなしで床へと降りたピカチュウが、ぴよいびよいとキユウコンの傍に寄つて、「ピカピカ！ぴーかちゅ！」と話しかける。

眠るように眼を閉じていたキユウコンは、初めは訝しげにピカチュウとぼくのことを見ていたけど、「ピーカ！ピカピカピツチユ！ちやーあ？」とさらに言葉を重ねると、やがて呆れたような表情で嘆息した。なんだかグリーンみたいな性格してそうなキユウ

コンだと思った。あ、昔の「バイビー☆」とか言う方じやなくて、最近のやたら世話焼きな方だから。念のため。

ぴか！とピカチュウに催促されたキュウコンはこおん、と小さく耳元で囁くように鳴き声を上げて、それでも起きない少女の頬をぺろぺろとなめた。うー、と声を漏らした少女をさらに鼻先で突つづいて、すり寄る。やや間を開けて、少女が目を覚ました。

「なあに、くーちゃ……だれ？」

「ぼくはレッド。きみこそ誰？確かここ、サブウェイマスターがいるって聞いてたんだけど」

「さぶうえいますたー……あー、んーと、ね。ノボリとクダリ、今日は病欠」

「病欠」

思わず言葉を繰り返した。病欠、つて。それで運行していいのかな、バトルサブウェイ。運行休止にすればよかつたのに。

「ノボリは、責任感、すつごく強いから。熱あつても具合悪くとも来ようとする。いつもだつたらクダリが代わりに両方のトレインの担当するんだけど、今回はダブルで倒れたから、職員が頑張つて最期まで通さないようにするから、つてことで、無理やり療養させてるなう」

「ふうん」

一応なんとなくの事情は掴めた。ぼくも病人に鞭打つような趣味はないから、まあ文句を言う気はない。ここでクレームをつけるのはよっぽど非常識でデイープな廃人くらいだろう。

しかし、だ。

となると、一体どうしたものか。

「…ねえ、ぼく、どうすればいいのかな。後日改めて挑戦？それって最初から？15両目から？21両目から？それにここまでバトルポイントつて、「バトル、する？」

「え」

少女の申し出に思わず目を瞬く。

ぼくに構わず、なんとなくぼけっとした様子の少女はさらに言葉を続けた。

「わたしに勝てば、30BPあげる。リタイアするなら、とりあえず途中までの分あげる。どうする？」

この子は、ぼくを知らないのだろうか。と、ほんやりと思う。流石にイッシュ地方にまで名前が知れ渡っているなんて思いあがつてゐるわけじやないけれど。鉄道員の人たちは、あれは知つてゐるのか業務上の云々でポーカーフエイスを貫いてゐるのかわからぬい。

ぼくに勝てる、思っているのだろうか。

——ぼくに勝とうと、思っているのだろうか。

——バトルが終わつてもなお、そう思えるのだろうか。

喰らつてやろうと吠える声が聞こえた。怯える影は無視をされた。戦いを望む炎が燃えた。退屈を嫌い光は逃げた。刺激を求めて歎声があがつた。

「ぴいか、ぴかっちゅ！」

モンスターボールを、手に取つた。

「いいよ、バトルしよう」

「そつかあ。じやあ、お仕事かあ」

少女が埋もれていた毛皮から立ち上がる。そして彼女が顔を上にあげたとき、雰囲気が一変した。

「それではチャレンジャー、レッド。私とのバトルをお望みならば叶えないわけにはいくまいよ！なにせカントーのチャンピオン殿、原点にて頂点たる赤様がはるばるこのイツシユにまで来てくださつたわけなのだから！」

さてさてルールは如何しようか。ひとまず33は基本、勝ち抜きでトレーナーのアイテム使用は不可、ポケモンを持たせるのは可。ああ、そうだ。ポケモンの入れ替えはあるかい？どちらでも私は構わないが。あとはそうだな、レベル制限をどうする？フラッ

トでも構わないし、あえてそこを解除でも私は構わないが？」

彼女は唐突に流暢に、道化じみた身振りで話出した。最初はその変貌にぽかんとしていたが、にいつと唇で弧を描いたアルカイックスマイルでふと正気に返った。そして、

—— 気持ちが昂るのを感じた。

彼女は、ぼくが誰だか知つていてる。

そのうえで、ぼくに勝てると信じていてる。

(ぼくは彼女に勝ちたい) (その自信をぼろぼろに崩してやりたい)

(ぼくは彼女に負かされたい) (この退屈な頂点から引きずりおろしてほしい)  
相反する願望が渦巻いて、ぶつかって、ぐちやぐちやになつて。

それは、なんと表現すればいいんだろうか。

どきどきと高鳴る鼓動が止められない。こんなのいつ以来だろう。

コトネが初めて来たときもそうだつた。昔、食糧を持ってきてくれたグリーンとバトルしていたときもそうだつた。

今はもう久しく感じていなかつたそれが体中を満たして、かたかたと体を震わせた。  
「おや。もしや体調でも悪いのかい？ それはいけない、医務室へと案内したほうがいい  
かい？」

「まさか、」

身体は熱くなつていく。思考はクリアになつていく。  
曇つてもいなかつたくせに、目の前が晴れたような感覚。  
に、リーグに、挑戦するとき、同じように感じていた。  
「ただの——武者震いだよ」  
旅をしていたころに、ジム

## レツド②

「それではルールの確認といこうか。レベルは50フラットでの3対3、トレーナーがポケモン道具を使うのは不可だがポケモンには1つだけ持たせてよいとする。勝ち抜き戦で入れ替えはなし。また、66の見せ合いもなし。ああ、あとはそうだな。技は制限をかけるかい?」

「別に」

「かけないということでいいのかな。ではフリースキルでいくとしよう」

ポケモンが持つ道具というのはよくわからないが、まあ些細なことだ。なんとかなるだろう。

1体目のモンスター・ボールを手に取り大きくすると、少女に改めて視線を向ける。彼女もぼくと同じ行動をとっているかと思いきや、キュウコンをボールに戻すと何事かを小さくつぶやいてから別のモンスター・ボールを手にとった。どうやら1番手はキュウコンではないようだ。

「それではチャレンジヤー。ルールの確認も済んだことだ、バトルを始めるとしよう。安全運転、ダイヤを守つて確認……なんだつたかな。忘れてしまった。まあ細かいこと

は気にしないでくれ、なにはともあれ目的は1つ。目指すは勝利だ、出発進行!』

前口上じみた長い台詞を口にすると、彼女は手に持ったボールを高く放り投げた。耳慣れたボールが開く音と共に姿を現したのは、ふわふわしたシルエットの女の子が好きそうな、可愛らしいイツシユ地方のポケモンだった。彼女も女の子だということだろう。綿みたいな見た目から、たぶん草タイプ。とはいってもチルタリスのような例もあるから断定はできない。

それに先に誰を最初に出すかはもう決めていた。草に有利な炎や飛行タイプではないが、不利になることもないだろう。

「頼んだ、カビゴン」

ボールから出てきたカビゴンは任せろというように胸を張り、相手と向かい合つた。こうして見ると体の大きさが全然違つて、ちょっと可哀そうな気もしたが、相手のポケモンの表情を見て氣を引き締めた。

ぼくのポケモンたちは今までずっと一緒に戦つてきたせいか「威圧感がすごい」「迫力が違う」なんてコトネやゴールドたちには言われてる。グリーンには言われたことないけど。

それに加えてこれだけの体格差があるので、かわいい見た目のポケモンは全く怯んでいない。むしろやる気満々の表情だ。

油断しない方がいいかもしれない。それに、小さい体はそれだけ攻撃を躱しやすいと  
いうことでもある。ただでさえスピードが遅いカビゴンなら尚更だろう。なら一撃目  
で動きを封じる！

「のしかかりで押しつぶせ。身動きをとらせるな！」

「くさむすびで留めろ！」

指示通りに小さな体を自分の大きな体躯の下敷きにしようと動いたカビゴンは、なに  
かに足をとられて床に倒れ込んだ。重いぶん、くらつた衝撃も大きかつたのか、カビゴ  
ンは苦しそうな声をあげた。

「カビゴン！——今は、」

「くさむすび」という技だよ。もしかして、カントーではあまり馴染みがないのかな？  
体重が重ければ重いほどダメージが増える、という技だ

「……っ」

カビゴンの体重は考えるまでもなく重い部類に入る。かなりのダメージを負つたと  
みていいだろう。迂闊に動くべきじやなかつた。情報収集を怠つていたツケがここで  
きた。これは完全にぼくの判断ミスだ。

普段ならかなりの大技、しかも連続でない限りは耐えきれるだろうとふんでねむらせ  
るところだつた。でも今回はねむつたカビゴンを何かのアイテムで起こすことはでき

ないし、ねむつたところに入つた追撃でダウンしてしまうかもしね、という考えがどうしても拭えない。なら、と起き上がつたカビゴンと顔を見合させた。いちかばちか。

「カビゴン、ふぶき！」

「コットンガードで防ぐんだ！」

弱点とはいえ、ふぶきは威力が高い代わりに当たりにくいのが難点だ。いつもいるシリガネ山なら元の天気の影響もあってほぼ確実に当てられるけど、今いるのはトレインの中。なんとか届いたふぶきの攻撃も、増えたもこもこの綿で防がれてしまった。けれど、これでいい。目的は当てるこじやない。

「今だ！ギガインパクト！」

「かあああああびいいいい！」

「えつ」

氣合いの入つた声と共に、カビゴンは相手が防御の姿勢を取つているところに突撃していく。今なら防御を解けばふぶきが当たつてしまふし、その隙に攻撃を通せるはず。そしてカビゴンのパワーならそのまま防御されたところで当たりさえすれば——「みがわり」——つ!!

カビゴンの攻撃が当たつた瞬間、ぼふんとその姿が消えた。技の発動が速い…？

「!! カビゴン後ろだ！」

「しかし残念。反動で動けない」

「つ！」

彼女が言うとおり、ギガインパクトは威力が絶大な代わりに反動でしばらく身動きが取れなくなる。言葉に詰まつたぼくを見て彼女は楽しそうに唇をつり上げると、彼女の手持ちに向かつて指示を出した。

「やどりぎのタネ」「どくどく」それからもう一度【くさむすび】だ

「えーりゅーるーるーりゅうううううう!!」

指示を貫つたポケモンは楽しそうに軽い身のこなしで技を繰り出す。最期の【くさむすび】をくらうまでもなく、ただでさえ大きなダメージを負つていたカビゴンはやどりぎのタネとどくどくのダメージで戦闘不能に陥つた。

ふう、と息をついて、カビゴンをボールに戻す。

「お疲れ様、カビゴン。——ずいぶん速いんだね、そのポケモン」

「エルフーンというんだ。この子が素早いというより、特性の問題かな。【いたずら】ころ」と言つてね、補助技に限つてはほぼ確実に先制できる

「いたずら【ころ】…」

初めて聞いた特性だ。でもイツシユのトレーナーならきっと当たり前に知つてゐる

んだろう。「くさむすび」のときにも思ったけど、悪いのはぼくのポケモンじゃない。初めてくる地方なのに碌に下調べもしていなかつたぼくの自己責任だ。

でも、――負ける気なんて、ない。

まともに攻撃は入らなかつたけど、繰り出す技からあのエルフーンが草タイプなんだろうことはわかつた。なら、次のこいつでいける。

それに、と改めて目の前の彼女を見る。

彼女は余裕すら窺わせる様子で悠然と立っていた。彼女は「ぼく」を知つてその上で、レベルフラットとはいえ、この結果を当たり前だと思っている。

微かに水音がして、そこでようやくぼくは自分が舌なめずりをしていたことに気が付いた。

かつてない手ごたえにざわざわと胸の中の獣が騒いでいるのだ。次に喰らうべき獲物はあいつだと。引きずりおろすに相応しい相手だと。

「行くよ、ラプラス」

「きゅううううううん！」

さあ、その余裕の微笑みを、どうやつて崩してあげようか。

## レツド③

「おや、と彼女は不思議そうに目を瞠つた。

「ラプラスか：リザードンあたりで来るかと思つたのだがね」

「水は草の弱点」

「しかし水の弱点もまた草だ。弱点+タイプ一致でおいしくいただけそうだね。まずは

【やどりぎのタネ】

「下に向かつてフィールド全体に【サイコキネシス】！」

青い光を纏つた力がエルフーンをべしやりと床に縫い付ける。飛ばされた種もラプラスに届く直前で地面に叩きつけられた。

「うわ、そんなのアリかい!? 何この重力操作的なサイコキネシスかつこいい！」

——つてそうじやなかつた、動けるかいまくら? いけるなら【みがわり】でそこから

逃げてくれ

【逃がさない】

ぼくの言葉に呼応するように青い光は強さを増し、より一層エルフーンを床へと押し

付ける。エルフーンも苦しそうな声を漏らしながらなんとか技を出そうと身をよじるけれど、そんなことはさせない。

あまりの容赦のなさにか、「うわあ」と声を漏らして彼女は若干引き攣ったような笑みを浮かべた。それを見ながらぼくも口元に笑みを浮かべた。まだまだこれからなのだから。

「ふぶき」からすぐまた【サイコキネシス】！エルフーンを抑えたまま【ふぶき】を操作して確実に当てに行け

「どれだけ器用なラプラスなんだい！」

見ての通りだけど、と今度はぼくが余裕を見せつけてやる。

エスペー・氷と連続で弱点、しかも威力の大きい大技をぶつけられたエルフーンは、当然みがわりを出す間も体力もなく戦闘不能。

いいぞ、とラプラスを褒めてやると嬉しそうにきゅおおんと声が返つてくる。

一方で動けなくなつたエルフーンをボールに戻した彼女はさつきのぼくのようにため息をついた。それを見て、胸が以前感じてからひどく久しい達成感で満たされていく。

しかしさつきとは逆にこちらが一撃もまともにくらうことなく終わってしまった。もしかすると最初だけだつたのかな、と思うと少し肩すかしというか、残念ではある。

「くーちゃん、出番だよ」

次に彼女が繰り出したのは彼女の布団代わりを務めていたキュウコンだつた。イツシユの知らないポケモンが出てくるとばかり思つていたので、さらに拍子抜けする。しかも水タイプでもあるラプラスに対して炎タイプのキュウコン：彼女は勝負を捨てたのだろうか？

——まあいい。そのつもりなら30BP、ありがたく貰うことにしてよう。

相手が炎タイプなら出すべき技の系統なんて決まつていて。威力が高いハイドロポンプと迷つたが、弱点の系統であるなら、ある程度の威力さえあれば一撃でいけるはず。なら威力よりも確実に当たる命中率をとるべきだ。

「ラプラス、「しおみず」

「ソーラービーム」

「つ!!構わずそのまま仕留めるんだ！」

キュウコンがソーラービームを覚えていることに驚いたが、ソーラービームは威力は高いものの、放つまでの溜めに時間がかかる。

当たればかなりのダメージを負うけど、こちらの攻撃の方が早いはず。だからこそ避ける指示を出さず、当てにいく！

「惜しいね。この子が普通のキュウコンなら正しい選択だつただろうに」

やれやれと肩を竦める彼女には、さつきまでぼくが持っていたはずの余裕が移っている。

——上がつた悲鳴は、ラプラスのものだつた。

「くくくくつなんで！」

「日差しが強くなつたの、分からなかつたかい？この子の特性は【ひでり】でね。この子がフィールドに出たとき、自動的に天気はよくなるんだ」

ひざしがつよい。

その状態がこのバトルにおいてどういった影響を及ぼしているのか。さすがにぼくだつて知つていた。

「ツ【ハイドロポンプ】!!」「【だいもんじ】で迎え討て」

心なしか焦つたぼくのものとは対照的に彼女は冷静に指示を告げる。

ふたつの威力は同じくらいだけど、相性としては有利なこちらの攻撃が押して相手のキュウコンにまで届く——本来なら。

ぶつかると同時にじゅわりと瞬時に蒸発させられ相殺された技に、薄々予想してたとはいえ舌打ちをした。

日差しが強い状態において、水タイプの技の威力は0・5倍、逆に炎タイプの技の威力は1・5倍。結局水タイプの技が弱点であつて弱点でないようなものじゃないか。

こうなつたら、さつきと同様、体の自由を奪つて無理やり高い威力の技を当てに――

「サイコキネシ 「悪いね！ 「ソーラービーム」 」 つ避け――」

強い日差しの影響でソーラービームも溜める必要なくすぐさま撃てるようになる。

ラプラスは1度目はなんとか持ちこたえたものの、さすがに2度目は耐え切れなかつたようだ。

というか、避けろとか馬鹿なことを言いかけてちよ、ぼくうわああああな状態なんだけどどうしよう。

この狭いトレンインのなかで身体の大きなラプラスがろくな回避行動取れるわけがないじやないかぼくの馬鹿。というかぼくの手持ちで小さいのはピカチュウくらいでは大概同じくらい大きいんだけどさ！ バトルサブウェイに来る前にそのあたりも考えればよかつたのに！！いやでもそれでもここまで普通にこのメンバーで来れたんだから仕方ないじやないか……！

もうぐるぐるしちゃつて思考がまとまらない。というより誰に言い訳してるんだよもう…

「お疲れラプラス：ありがとう」

とりあえず頑張つてくれたラプラスをボールに戻す。

なんていうか、油断してたところを思い切り足元掬われてしまつた。

最初だけ？肩すかし？たつた一体倒した程度で、何を慢心していたんだ。目の前にいるのはただ喰われるだけの草食動物じやない。簡単に仕留められる獲物なんかじやない。

全力で挑んでなお、勝てるかどうかわからない強敵だ。  
なら、次に出すべきポケモンなんて決まつてる。

「頼んでいいかい、ピカチュウ」

「ピカピッカ！ぴいか、ピカツチユ！」

任せろと言わんばかりの力強い返事を返してくれた、頼もしいぼくの最強の相棒。  
かわいらしいその姿を見て彼女はつと目を細めた。

「……そう来るとは思わなかつたかな」

「見た目で判断すると、痛い目みるよ」

「ピカチュユ！」

「いやいや、そういう意味ではないさ。むしろたかだかバトルサブウェイのノーマルト  
レインごときには噂の黄色い悪魔が参戦するとは思わなかつたというか。それだけ私が  
評価していただけたということだと思えば光栄だがね」

「こーん……」

「おや、どうかしたのかいくーちゃん？……ああなるほど、そうだね。覚えていれば職員

を庇つてあげる必要がありそうだ。50フランとはいえノーマルで赤様の黄色い悪魔なんて止められるはずもあるまいよ。さて、相手にとつては不足なし、存分に暴れたまえ」

相変わらずの余裕を見せるものの、彼女の目をよく見てみれば油断も隙も見当たらない。ぼくもそういうところは見習うべきなのかもしれない、とちょっとだけ思つた。見習うかどうかは、このバトルの勝敗で決めさせてもらおう。

——本人の知らないところで、これからグリーン・コトネその他暫定レッドのライバルたち諸君の待遇が賭けられた瞬間だつた。

## レッド④

「しかし、だ」

言いながら長い髪をかきあげた彼女の仕草は妙に様になつていた。グリーンとかワタルがやつたらナルシスト乙と言うところだ。あ、でもシンオウの方のチャンピオンの女人だつたら似あうかもしない。たしか名前と服装の色がなんか違うひと、だつた気がする。

「見かけによらずパワーが高いことは評価するけれど、ピカチュウの防御が紙なのも知つてるのでね。悪く思わないでくれたまえ。先手必勝だ、できれば一撃でいこうじやないか！」「だいもんじ」！

「でんこうせつか」でかわすんだ！」

指示を受け素早くキュウコンから吐き出された炎は文字通り「大」のような形を描いているため、中央下には隙間がある。うまいことその穴をくぐりぬけたピカチュウは勢いをつけてキュウコンへと身体をぶつけた。

せつかくの大技をかわされた少女から舌打ちが聞こえる。でも、舌打ちしたいのはこつちの方だ。

「くーちゃんツ踏ん張れ！」

「続けて『アイアンテール』！」

「まもる】！」

キュウコンの火力が思つていた以上にすぐくて、ピカチュウも思わずスピードを緩めてしまつたみたいだ。連続で技を決めようと思つていたのに、スピードが落ちたでんこさせつかじや威力が足りないのか怯むことなくすぐに立て直されてしまった。そのおかげで【まもる】が間に合つてしまい、勢いに乗つて繰り出されたアイアンテールはあと一步のところで防がれてしまった。

だからといってピカチュウが悪いわけでもない。ただ近くで見ているだけのぼくでさえ炎の熱を感じたくらいだから、その下を潜り抜けたピカチュウが感じた熱さは半端じやないはずだ。

それに、と消える間際の【まもる】の壁に視線を向ける。

壊れさえはしなかつたものの、びしひしと壁に入つた鱗は、それだけのピカチュウのパワーを示している。

「ナイスファイト」

「ぴつか！」

半端じやない勢いの炎を恐れずに指示に従つてくれた相棒にねぎらいの言葉をかけ

れば、「当然だ」と言わんばかりの返事が返ってくる。それに心強さと、さらに搔き立てられるなにかを感じる。そしてそれは、ピカチュウも同じようだ。

「——この調子で押していくよ」

ピカピ！

「ふむふむ。なかなか、いや素晴らしいコンビネーションだ。指示から技までのタイムラグがほとんど無いに等しいとは。危なかつたね——こちらも攻めようか、【かえんほうしや】」

「〔ボルテッカ〕！」

「はあつ  
!!?

ボルテッカーの体勢を取り、まっすぐに突撃してきたピカチュウに彼女は目を見開いて間抜けな声をあげた。

正氣かい!?

「——ぼくはこいつを信じてる」

ぼくの声に応えるように、声をあげながらさらに速さと纏う電流の勢いを増し、ピカチュウはまっすぐに、火炎放射の中に突入していく。

キュウコンの炎とピカチュウの電気。初めは互角にぶつかっているように見えたそのふたつのエネルギーの衝突は、徐々にピカチュウが押し始め、とうとう炎を押し切つてその膨大なエネルギーを纏った身体をキュウコンへとぶつけた。

「ぎゃんっ!!」

「くーちゃんっ!!しつかり、くーちゃん?」

ぎりぎりまで「かえんほうしゃ」を放つていた上に身体が大きせいでかわすことができなかつたキュウコンは、ボルテツカーをまともに受けたようだ。

彼女が呼びかけても力なく、くてんとしたまま。なんとか一撃で戦闘不能にできたようだつた。

ばちり、と大きな音を立ててピカチュウの身体を電流が奔る。

「うわあ弱点でもないのにくーちゃんが一撃オチとか…しかも火炎放射のなかボルテツカーで突つ切れるものか普通……もしかしてというかもしかしなくとも攻撃Vの極振りなんじやないかいピカチュウ」

「……? 何言つてるとかよくわからない」

「デスヨネー。まあ多分補正つてヤツなんだろうさ。でんきだま所持は予想してたけどまさか個体値Vが来るのは思わなかつた…流石は原点にて頂点、そこに痺れる憧れるうつ」

「……ありがとう？」

「…………わからなかつたら流してくれて構わないのだよ？ただちよつと世間の不条理さを嘆いているだけさ」

ありがとう、よく頑張ってくれた。彼女はそう言いながら優しくキュウコンを撫でて、ボールへと戻した。そしてそのまま腰からもう一つ別のボールを取り、もう片方の手を腰に当てて微笑みを浮かべて言つた。

「さて、長いようで短かつたこのバトルも次でラストバトルだ。泣いても笑つてもこれで終わり。さあ、準備はいいかい？」

「いつでも」「ピイカ！」

「よろしい。それでは参るとしよう。私の最後のポケモンはこの子だ——お願いするよ、ちいくん」「ぴやあ♪」

人懐こくトレーナーに向けて可愛らしい声をあげてみせたエーフィは、こちらに視線を向けた途端にひどく冷めた、冷たい雰囲気へ変貌した。

——強い。

それが対峙するだけでびりびりと伝わってくる。間違いなく、今日出されたポケモンたちの中では最強のポケモンだ。

——でも。

ピカチュウを見ると、ピカチュウもぼくと同じことを考えていたのか、ぼくを見ていた。そして、どちらからというわけでもなく、こくりと頷く。わざわざ口にするまでもない。そう――ぼくらは勝ちにいく!

## レッド⑤

「残念ながら君のピカチュウに攻撃を当てることはなかなか容易なことではないらしいな。【だいもんじ】も【かえんほうしや】もまともにくらつてくれないとはなんとチャレンジヤー泣かせなチャンピオン殿だ」

く一ちゃんだけ当たりさえすれば一撃でおとせる自信はあるんだが。

悠然と構え佇んでいる彼女は挑発するようなことを口にしたけれど、多分本人にそんなつもりはないんだろう。これまでのバトルで彼女の実力はぼくだけて存分に味わっている。

つまり、まともに一撃喰らつたら負ける。

それはエーフィ相手でも同じだと考えるのが妥当。いかに攻撃を回避してこちらの攻撃を当てるかがこのバトルの鍵となる。

逆に彼女は一撃当てさえすればいいのだから、どうやつて当てるかが問題になつてくるだろう。エスパータイプのエーフィだから、さつきぼくがラプラスに使わせた【サイコキネシス】みたいなことをされると非常にまずい。決まつてしまえば拘束をどうにかするより前にダウンしてしまう。

幸運なのは、もともとあれはぼくが考えた使い方だから、攻略法もある程度わかつていることだ。

あの【サイコキネシス】のウイークポイントは、広い範囲を圧す代わりに一部分にかかる負荷が少なくなってしまう点。だから実際は、まず軽く重圧を加えることで動きを遅くさせ、相手のポケモンが戸惑つて上手く動けないうちに一部分に力を集中させねじ伏せると、いう二段階の攻撃になつていて。第一段階で動きが止まらなければ、うまくターゲットを絞ることができないところが難点——そこを逆手にとる。

ピカチュウのスピードなら、多少の負荷があつても十分動ける。どうにか狙いを定めようと集中するエーフィを速攻で落としにいく！

「ピカチュウ！」「故に質より量といこう。下手な鉄砲数打ちや当たる、つまるところ数こそが強さだとの考え方もある。——ちいくん、【シャドーボール】で弾幕を展開……え、」

道化染みた素振りで彼女が腕を振るうと、動きに合わせるようにシャドーボールが宙に作り出されていく。普段バトルで見ていているのに比べれば半分くらいの大きさだけど、数は2倍どころの話じやない。20を超えた時点での数えるのが馬鹿らしくなつた。

「——放て」「ふいいいいいつ」

「ツ【こうそくいどう】【でんこうせつか】でかわすんだ！」「ぴつ！」

普通の攻撃と違つて矢継ぎ早にピカチュウに向かつて撃ち出されるシャドーボールはヒュードドドドドド、と床にぶつかつては鼓膜を搖さぶる騒音をたてる。

躊した先にすかさず撃ちこまれるそれは一瞬でも足を止めたら一つが当たり、一つが当たれば連續ヒットするのが目に見えるようだ。正直、避けるのにいっぱいいっぱいで攻撃するどころじやない。欲張つて攻撃しようとするその瞬間に勝負がつくだろう。

「うーん、これでも避けられてしまうとは。足りないのは速さか、それとも数か。『そこ、弾幕薄いよ！』とでも言うべきか？スクライドねたに走るべきか」

やめてほしい。これ以上早かつたり数が多くつたりすればどう避ければいいんだ。あと後半は意味がわからない。

ようやく数が尽きてきたシャドーボールに一息つけるかと思ひきや、ぱん、と両手を合わせていたずらっぽく目を細めた彼女にぞわりと悪寒が走る。

「まあふざけた発言はこのくらいにして。ふふ、この手があつた」

妙案だと微笑む彼女はちいくん、と彼女の相棒の名を呼んだ。

「動きながら【スピードスター】を。いいと言ふまで続けて」

「？　⋮【でんこうせつか】で間合いに入るんだ」

「かわして【スピードスター】。当たれば連撃がくるだろうから回避を優先に、しかし隙を見てさらに【スピードスター】。狙いは適当でいい」

さつきの「シャドーボール」はエーフィの背後一面に浮かべられた大量のシャドーボールが撃ちだされていたから、数の多さと次の行動地点に撃ちこまれる狙いの正確さに反撃する隙がなかった。けど、スピードスターじゃそんなことはできない。一体何を考えて――

「必中技の必中技たる所以を知っているかい?」

「ひつちゅう…?」

「普通の技との差別化は集中して操作するでもない半自動的なその追尾性、ホームинг機能にある。要は――狙つた獲物は逃がさない攻撃だ」

「ピカピツ!」

気づけばあらゆる方向から「スピードスター」がピカチュウに向かつてきている。どういう――まさか、見当違いの方向に撃つたと思っていた攻撃がピカチュウに向かつてきているのか?!

さつきはある程度一度に撃ちこまれる数が決まっていたけど、今度は違う。避けるスペースすらない。

こんなの、躰せない。――かわせない、なら!

「――回転しながら「十万ボルト」!スピードスターを相殺するんだ!」

「! カウンターシールドだと……平行世界の電波でも受信したのか?」

ピカチュウが地面でぐるぐると回りながら全方位に繰り出した十万ボルトは、電撃で次々にスピードスターを打ち消した。電撃の余波はスピードスターを相殺するだけじゃなく、エーフィにまで届いた。するりと避けられてしまつたけど。

攻撃と防御を同時にできる技、か。使えるかもれない。

「主人公補正もここまでくると本当になんというか……というか十万ボルトの予想外の高威力について k w s k : A S 極振りじやないのか話が違うっていうかこのピカチュウ 510じゃないだろ努力値エ…」

よくわからないことをぶつぶつ言つているけどひとまず意表をつけた今がチャンス。

「一気に決める。【ボルテッカ】！」

「おつと。【フラツシユ】で目くらましだ」「ふい」

「ぴかっ!?」

一瞬視界を真っ白に染めた強烈な光に、ピカチュウが戸惑つた声を上げる。間近で浴びた光で目がちかちかしてエーフィがよく見えないんだろう。離れていたぼくも少しまだ目がちかちかしてくるくらいなんだから。それでも離れていたぶん、ぼくは回復するのが早かつた。少なくとも、影くらいははつきりと像を結んだ。

「止まるな！ 真っ直ぐ、そのまま真っ直ぐ行くんだ!!」

「ピカ…ぴかちゅ！ ピカ、ピカ、ピカ、ピカ——」

ぼくの言葉を信じてピカチュウは動きを止めることがなく、徐々に強さを増していく電流を纏つて突進していく。彼女はそれを見て何事かを小さくつぶやいたように見えた。応えるようにエーフィが低く構える。

「[めでたし]」

「そのまま〔ボルテッカ〕でぶち抜け！」

冗談、抜けるとでも――嘘だろ」

【まもる】でできた壁にぶつかつた衝撃に弾き飛ばされることなく、さらに奥のエーエイに向かつて足を止めないピカチュウの勢いに耐えかねたのか。ぱき、ぱきと場違いに細く纖細な音が聞こえて、壁に亀裂が奔る。

まだ壁は壊れたわけじゃないけれど。でも、ぼくはぼくの相棒を信じている。

ぼくの声に応えるように、さらに電流が勢いを増す。ピカチュウの声が大きくなる。電気と壁がぶつかる音と光が広がっていく。

そして。

ぱりいん、と、ガラスが碎けたような音が聞こえた。

「そんなツ――なんて言うとでも思つたかい？ 今だ、【あなをほる】」

「なに、」

ちやあつ!?と聞こえた悲鳴がピカチュウのものだと認識するのに時間がかかった。

そんな、確かに、エーフイに【ボルテツカ】を当てたはずなのに――!

「おやおや、最初に見ただろう? 「みがわり」だよ」

「いつの間に……」

「うーむ、戦闘中のネタばらしは負けフラグなんだが。まあ勝ちは確定したようだし  
言つてもよさそうではあるか」

「…ピカチュウっ!」

「ひい……」

よろよろと起き上がるピカチュウは弱点の攻撃をもうにくらつてボロボロだ。それ  
でも、立ち上がつてくれた。まだいける。

「勝負はまだ、終わつてない」

「残念だが、それはない。君は忘れているのか、それとも知らないのかは知らないが――

」

ぱちり、と大きな音を立ててピカチュウに電流が奔つた。

「【ボルテツカ】」は相手に与えたダメージの1／3を反動として受ける。ただでさえ体  
力のないピカチュウに、この反動がいかに致命的か。わかるだろう?」

彼女が言い終わると同時に、立ち上がつたピカチュウの体勢がふらりと揺らぐ。

「ピカチュウ!!」

「ピカチュウ戦闘不能。

——私の勝ちだ」

## レッド⑥

「そういうわけでBPはなし。またの乗車をお待ちしているよ」

「待つて」

ひらひらと手を振つて頭から帽子を取つた彼女は何の未練もなくあっさり背を向けてしまつた。慌ててコートの袖を掴めば不思議そうに首を傾げる。

「何だい？もうバトルは終わつただろう」

「解説。してない」

「解説？……ああ、最後のアレかい」

彼女に近づいたぼくに対しエーフイは、るる…と低く唸つて威嚇してきたけれど、彼女がひよいと抱き上げれば途端に嬉しそうな甘えた声をあげた。目を覚ましたピカチュウがぼくの腕の中、その様子を何とも言えない顔で見ている。…何を言つているんだろう。ちょっと気になる。

それはともかく、訊きたいのはさつきのバトルについてだ。

「フラッシュで日くらましをしてる隙に【みがわり】をして【あなをほる】で地面に隠れ

たのさ。ちなみに【まもる】は身代りのすぐ下で使つたんだ。フラツシユ以降、ちいく  
んの鳴き声は聞こえなかつただろう?」

「じやあ最初からフラツシユはそのつもりで…」

「当然だ。アイアンテールで【まもる】に鱗を入れるようなピカチュウがタイプ一致の  
【ボルテツカー】で【まもる】をどうにかできないと盲信できるほど馬鹿な人間じやあな  
いつもりさ」

その答えになるほど、と頷いて、ふと問いかける。

「また、バトルできる?」

「……時の運次第といったところかな。ノボリとクダリがダブルでノックダウンだなん  
て珍事は10年に一度でも珍しいレベルだと思うのでね」

「じやあサブウェイ以外で」

「…善処しよう」

それではそろそろこの子たちを回復させたいのでね。

モンスター・ボールを軽く掲げて言われてしまえば、引き留めるわけにはいかなかつ  
た。ぼくも頑張つてくれたみんなをポケモンセンターに連れていくつてあげなくてはい  
けない。

それにもしても、ときつきのバトルを振り返る。

特性や技を巧みに使った戦術、目まぐるしく変わる戦局、一瞬の判断が全てを決める臨場感とそれに伴う高揚感。

きもちよかつた、と余韻に浸つてうつとりする。

だつて、お前だつて愉しかつただろう？なあ、相棒。

ぴつか、と返された返事に口元を吊り上げて、ようやくホームへと足を動かす。とりあえず、しばらくは頑張つてバトルサブウェイに通うことから始めよう。世界はまだまだ、つまらないモノではないらしい。

\*\*\*\*\*

「本日はバトルサブウェイご乗車ありがとうございます。わたくし、サブウェイマスターのノボリと申します！」

さて、次の目的地ですが、あなたさまの実力で決めたいと考えております。ポケモンのことをよく理解なさつているか、どんな相手にも自分を貫けるか・・・・・勝利もしくは敗北どちらに向かうのか・・・・・では、出発進行ーツ!!

最終車両で姿を現した黒いサブウェイマスターを見て、シロガネ山在住のカントーの

チャンピオンは一言。

「チエンジで」

「どうしてでござりますかっ!?」

そして以後彼がバトルサブウェイであらゆる電車に何度も挑戦しても、最終車両にサブウエイマスター以外が現れることはなかつたという。

# 番外：マー・マレード

すべてのはじまりをおぼえている。

0と1のいうたつた二種類の文字の羅列を振り籠に。

何百もの同胞達の中から奇跡的に選ばれて。

【生まれて】初めて目にしたあの人の姿は何故か変わつていて、年齢も声も服装も目の色も髪の色もなにもかもが違つたけれど、それでも目が合つた瞬間に理解した。

「ま、すたー」

きつとあげた声の意味は伝わらなかつたのだろうけれど、彼女は「よろしく」と微笑んだから。

私は、【世界】に産声を上げた。

たつたひとり、彼女の存在を完全に理解できる唯一の相棒として、存在を許されたのだ。

\* \* \* \* \*

「マンせんぱあいっ!!! ガラの悪い不良ポケモンがいじめるううううう！」

「だ・か・ら! 誰に向かつて口きいとんじゃワレエエエエエエエ!!」

容赦なくベしやりと「ねんりき」で床に押さえつけられたエルフーンはぎやんぎやん  
喚きながら暴れようとするが、体の拘束はびくともしない。

力いっぱい足掻きすぎて「ふぎゅうううううううう…」と妙な声をあげる様子をハツと鼻で嘲笑いつつ、エーフイはするりと優雅に身を翻し、サーナイトへと向き直った。

「言つとくけどなあ、駆けや、駆け。こん生意気なんどうにかせんといかんやろ。最近調子乗つてミロカロスの方にもちよつかい出しとるみたいやし」

「オレは強くなりたいだけつすもん——!! アイツが弱いのが悪いんすよお」

「黙らんかい綿。——邪魔せえへんといてや？まあ、最近やつとらへんやつたし、バトルしてもわいは構わへんけどな。：今度こそ勝つたるわ」

「あらあら、元氣いつけばいねえ」

「その余裕 そうな態度、ぶち壊したる」

١٢

ふおん、という音と共にいくつもの黒い影の玉を自分の周りへと浮かべたエーフィを、サーナイトは微笑ましく見つめた。

彼は自分をどうしても倒したくて、わざわざ駅の倉庫のわざマシンを自ら使つてサ一

ナイトの弱点であるゴーストわざ、「シャドーボール」を覚えてきたのだ。より効果的に扱うために特訓も欠かさずに行つているのも知つていて。

シャドーボール以外にもなにかないか、ちよこちよこ倉庫に行つてはとりあえず覚えられるわざを全部覚えて、使いこなせるように練習しているのも知つていてるし、最近エルフーンに一方的リンチに遭つているミロカロスのために「ふぶき」と「れいとうビーム」のわざマシンを（勝手に）持つてきて覚えさせてあげたことも知つていて。

最初はツンしかなかつたイーブイだつたけれど、マスターに心を開いていくうちにサーナイトの存在に嫉妬するようになつて、しそつちゅう喧嘩を売つてきたものだつた。最近はご無沙汰だつたのでなんだか懐かしい。

ちなみにレベルが3ケタのサーナイトに1ケタのイーブイが喧嘩を売つた結果は言うまでもない。

そんな現在のエーフイが普通のポケモンでは太刀打ちできなくらい強くなつたのも知つていてるが、生憎サーナイトは普通のポケモンではなかつた。とはいつても改造はされていない。厳選や遺伝わざ調整なんかはあつたけど。

そんなサーナイトはほわほわと慈愛に満ちた笑みを浮かべながら、「ひかりのかべ」→「まもる」でシャドーボールを防ぐと、全力で「はかいこうせん」を返してあげた。

\*\*\*\*\*

案の定一撃KOされたエーフイをつつきながら、うーんとサーナイトは首を傾げた。  
「やりすぎちゃつたかしら…？いやしのはどう要る？」

「いらんわ！」

意識を取り戻したエーフイが目を閉じてふいつと祈るように天を仰ぐと、きらきらと星のような光がその身体を取り巻いた。

「あら。ねがいごとなんて覚えてたのね。あさのひざしを使うのかと思つたわ」「発動さえしてしまえばすぐ動けるしな。そこの木綿がなんか構えどるし」

「げつばれた!! 背後から×つそりソーラービームぶちかますつもりだつたのにい！」

「そーかそーか。よし、×ね」

「放送禁止用語はんたげふうつ!!」

爽やかにひどいことを告げたエーフイはすでに攻撃の準備を終えていたらしい。エルフーンの頭上から襲つた「みらいよち」は容赦なくエルフーンの意識を刈り取つた。ふんつとさらに上から踏みつけにしているエーフイは不機嫌そうにぶすくれている。やつあたりといわんばかりにエルフーンをげしげし足蹴にするのを止めようかどうか迷つたが、多分平氣だろうと思つて放つておくことにした。綿だし。

いざとなつたらいやしのはどうで回復してあげればいいよね。うん。

「くつそおお……なんつて勝てへんのやあ……！」

「ええと……経験の差？」

「わいだつてかなりバトルしたし鍛錬もしとるわ！」

「うーん、でもねえ…」

フィロがマスターに懐くまでが特に大変な時期だつたんだもの。

主がつけたエーフィの名前と共に、サーナイトは昔のことを思い出す。

【未帰還者】となつたレイヤー達の中で、現実が受け入れられず暴走したトレーナー。  
【自分の世界】で頂点に立ち、己が最強と錯覚して【ハイリンク】でやらかしたトレーナー。性格やレベルを考えなかつたせいで言う事を聞かずに暴れまわるポケモンたち。大抵がレベル100であり、極振りであり、時に6V個体やそれに準ずるものであり、種族値がヤバイ伝説のであつた。

レベル制限なしという唯一のアドバンテージを遠慮なく活用して、ばつたばつたと明らかにイジメな強さで迷惑行為を働く連中を倒して倒して倒しまくつた。

ようやくハイリンクが落ち着いたころにはレベルが180を超えていた。  
そういえば目の前のエーフィもどうしたことか、レベル制限が外れている。改造コードやチートではなく、これはエーフィの純然たる努力の結果だろう。

そう思うと、なんだか嬉しくなる。  
つまるところ、

### 絶対的強者の余裕

「うん、これからもその調子で頑張ればいいと思うわ」  
にこにこしながら言われた台詞に、エーフィはぶすぐれたまま尻尾をべしひし床に叩きつけた。